Contact Zone 2017 特集論文②

信じること・装うこと
――インドネシア人女性たちのヴェールと服装

野中 葉

＜要旨＞
本稿は、日本とインドネシアに暮らすインドネシア人ムスリマたちへの聞き取り調査に基づき、既存のファッション論や衣服の働きの議論などに照らしながら、ムスリマのヴェールと服装の着用の意義を検証し、イスラーム教徒にとっての信仰と装いの関係を考察した。衣服に関する既存の議論によれば、衣服とは、他者との差異化という機能を内包し、同時に、人の存在を社会的属性に埋め込む機能も持ちあわせるものと理解されてきた。自己と他者の関係性の中で作り上げられ、その社会的役割を担うものだった。しかしながら本稿で論じたムスリマたちの意識の中には、自分と他者以外に、常に神の存在がある。ヴェールや服装も、他人に見られているのと同時に、神に見られ、神に試されているという認識があり、それゆえに、神の命令に適う服装をしなければならない、という自己規制が働いている。一方で、ヴェールや服装に関する神の命令は、概略的であり、仔細な事柄は人間の判断に委ねられている。神に命じられた最低限のルールを守った上で、自らの好みや、どこに暮らして、誰と関わるか、などによって、自らの着用するヴェールと服装を決めている。イスラーム教徒たちの装いは、このように、他者との関わりと同時に、神との関係性の中で規定されている。

キーワード：インドネシア，ムスリマ，ヴェール，ヒジャーブ，装い
NONAKA Yo　慶応義塾大学総合政策学部専任講師　yon@sfc.keio.ac.jp

1 はじめに

1-1　女性たちのヴェール着用

信じることと装うことは、いかに結びついているのだろうか。ある信仰を持つ人々が、特定の装いを纏うことは、世界各地で散見されている。外部との関わりで言えば、特定の装いが、ある個人や集団の信仰や宗教を示す、つまり記号的役割を担っているのである。それでは、実際に信仰を持つ人たちの装いは、その人の信仰といかに関わっているのだろうか。これが本稿のテーマである。この問いを明らかにするため、本稿では、インドネシア人イスラーム教徒の女性たち（以下ムスリマ[1]）のヴェールと服装を取り上げる。中東地域を中心として、世界中に広がっているムスリマの多くは、髪の毛を覆うヴェールを被り、身体全体をゆったりと覆う服装をしている。彼女らのヴェールや服装は、宗教的装いの一つととらえることができる。

本稿で扱う東南アジアのムスリム大国インドネシアでも、現在多くのヴェール姿の女性たちの姿を目にすることができる。インドネシアは、世界第 4 位の人口大国であり、また、そのうち約 9 割、つまり約 2 億 2 千万人がイスラーム教徒である世界最大のムスリム人口を抱える国である。1960 年代後半より 30 年以上にわたって長期権威主義体制を敷いたスハルト大統領が 1998 年に退陣して以降、民主化と経済発展が進行中である。同時に、社会の様々な側面でイスラームが顕在化し、イスラームを以前よりも真面目に実践し、信仰する人々が増えている。ヴェールを着用するムスリマも、インドネシアでは近年、急激に増加した。30 年前には、町中でほとんど見られなかったヴェールを纏う女性たちの姿は、現在では、日常の光景になった。それに呼応して、最高級の商品を扱うショッピングモールから生活必需品を求めて庶民が集う伝統的市場に至るまで、町中の様々な店舗で、色々な種類のヴェールや服が販売されているのを目にすることができる。

一方、日本でも、昨今の訪日外国人観光客の増加や、在日外国人の増加に伴って、私たち日本人が、イスラーム式のヴェール姿の女性たちを目にすることは、以前に比べ格段に増えた。2020 年の東京オリンピックを間近に控え、増加するムスリム観光客や在日のイスラーム教徒たちをいかにもてなすかは喫緊の課題であり、地方自治体や各種企業によるハラール関連産業への注目も集まっている。

本稿は、日本とインドネシアに暮らすインドネシア人ムスリマたちへの聞き取り調査に基づき、既存のファッション論や衣服の働きの議論などに照らしながら、ムスリマのヴェールと、後述する一定のルールに則った服装の着用の意義を検証し、イスラーム教徒にとっての信仰と装いの関係を考察するものである。筆者はこれまでインドネシアに暮らすムスリマのヴェール着用現象を、インドネシア社会の変容に照らして論じてきた。本稿は、ムスリマの信仰がいかに装いに作用するかを論じるものであるため、インドネシアに

1「イスラーム教徒の女性」を指すアラビア語起源の単語。「イスラーム教徒」を指す「ムスリム」と共に、インドネシアでも、また日本でも一般的な用語になりつつある。

暮らすムスリマのみでなく、日本に暮らすインドネシア人ムスリマも考察の対象にした。同じ文化的背景や生活習慣を共有するインドネシア人ムスリマでありながら、異なる地域に暮らす人々を対比させることで、イスラーム教徒としての装いや服装に対する意識の共通性を明らかにし、また、イスラーム教徒がマイノリティーの日本にあって、彼女らがいかにして信仰に基づく装いを実践しているのかも考察したい。

1-2　クルアーンにおけるヴェール

イスラーム教徒の女性たちがなぜヴェールを着用するのか、その根拠はイスラームの聖典クルアーンの記述に見つけることができる。クルアーンは、西暦 610 年頃から約 20 年間にわたり預言者ムハンマドが継続して聞き続けた神からの啓示をまとめたものであり、クルアーンを神の言葉と信じることは、イスラーム教徒にとっての重要な義務の一つである。またクルアーンの記述はイスラーム教徒たちにとって、生きていく上で必要なあらゆる事柄が網羅された生活の指針とも言うべきものである。したがってクルアーンの記述を見ることは、彼らの行動の背景にあるものを探るために有用である。

女性のヴェール着用に関し、最もよく引かれるクルアーンの章句は、以下の 2 つである。現代のインドネシアにおいても、以下の 2 つの章句はよく知られており、女性たちにヴェール着用の根拠を尋ねると、その答えの中で、必ずと言っていいほど引用されるものである。

> 信者の女たちに言ってやるがいい。かの女らの視線を低くし、貞淑を守れ。外に表れるものの外は、かの女らの美や飾りを目立たせてはならない。それからヴェールをその胸の上に垂れなさい。（御光章 31 節）[2]

> 預言者よ、あなたの妻、娘たちまた信者の女たちにも、かの女らに長衣を纏うよう告げなさい。それで認められ易く、悩まされなくて済むであろう。（部族連合章 59 節）

上記 2 つの章句から、イスラーム教徒の女性には、「ヴェールをその胸の上に垂れ」ることと、「長衣を纏う」ことが命じられていることがわかる。しかしながら、「目立たせてはならない」とされる女性の「美や飾り」が身体のどの部分を指すのか、「貞淑を守る」ためには、どのような装いが求められるのかはクルアーンの記述には明らかではないし、また「ヴェール」や「長衣」の形状や素材、どの個所を覆うべきか、ということに関しても、クルアーンにはこれ以上に詳しい記述はない。クルアーンに記述のない、より詳しい事柄については、クルアーンの次にイスラーム教徒たちが生活の指針とするスンナ（預言者ムハンマドの言行）が参照される。預言者のスンナは、彼の弟子たちによって伝承され、のちにハディースとしてまとめられ、記録された。現代のインドネシアにおいては、

2 本文中に引用したクルアーンの日本語訳は、[日本ムスリム協会 2002] に依る。

上記のクルアーンの章句に加え、複数のハディースの記述を含めた解釈に基づき、女性の服装の最低限の条件として、以下の 3 つが広く受け入れられている。①顔と手のひら以外の箇所を覆うこと。②生地が透けないこと。③身体のラインを隠すゆったりとした服装であること[3]。

この条件に沿うように、インドネシア社会では近年、ヴェールを身に着け、ゆったりとした全身を覆う服装をする女性たちが増えている。一方で、服装やヴェールに関し、これ以上に詳しい内容については、インドネシア国内で様々な議論があり、色々な意見が乱立している。そもそも、クルアーンに書かれていない、こうした仔細な事柄は、時代と場所の要請に応じ、各時代、各場所の人間たちの英知による判断に委ねられている［奥田 2011: 217］[4]。女性のヴェールや服装についても、各時代とそれぞれの地域ごとに、様々なバラエティが見られるのは、こうした人間の側の判断の違いによる。インドネシア人ムスリマたちのヴェールや服装の色や形、素材や大きさについて、バラエティが豊富なことの背景には、これらに関する活発な議論と異なる意見をある程度許容できる社会状況がある。

1-3　ヴェール、装い、日本に暮らすイスラーム教徒をめぐる議論

本稿の議論に関連のある先行研究を、3 つの切り口でまとめてみたい。

一つは、衣服やファッションに関する議論である。これまでに膨大な研究の蓄積がある分野ではあるが、衣服が身体保護という役割を超えて、個人の意識や集団の文化的特性を他者に提示する役割を持つことは、広く認知されていると言っていいだろう。鷲田清一は、男性のネクタイ、女性のハイヒールなどの事例を挙げて、現代の衣服は「身体の保護」や「機能性」ということだけでは説明がつかない要素がたくさんある、と指摘する［鷲田 2012: 18］。同時に、鷲田は衣服の社会的記号としての働きについても言及している。制服や伝統的民族衣装を例に挙げて、これらの衣服を着ることで人の存在が社会的属性に還元されると言う。こうした制服や衣装によって、人は「だれ」であるという固有性をゆるめ、匿名の人間類型の中に埋没することができるのである［鷲田 2005: 79］。その一方で、どんな服の着方にも、服の文法をずらすという面があることも指摘されている。服を着るというのはその意味で、個人としての私たちの存在を枠どっている社会的規範とのすり合わせであり、格闘である［鷲田 2005: 84］。どこまでやれば他人が注目してくれるか、どこまでやれば社会の側からの厳しい抵抗にあうか、などといったことを身体で確認しているのである［鷲田 2005: 55］

また、ファッションは言葉やしぐさと共に、人間の文化を構成する最も基礎的な次元の

3 3 つの条件は、上記のクルアーンの章句の他、複数のハディースを根拠に引き出されたものである。詳しくは［野中 2015: 7-14］を参照。

4 クルアーンとスンナを法源とするこうした法発見の努力は、イジュティハードと呼ばれている。しかし奥田敦によれば、実際には、恣意的で野放図なイジュティハードが繰り返される一方、既存のイスラーム法学への追従が義務であり、そこからの逸脱は許さないとする法学派主義も根強く、しかるべきイジュティハードの実践は望めないのが現実である［奥田 2011: 226］。

一つである［鷲田　2005: 22］。それゆえに、私たちが身体を持った存在として、自分をどのように社会的な場に登場させるか、その社会的ディスプレイのスタイルがファッションと呼ばれるのである。私たちの存在の身体性と社会性が交差するところにファッションという現象が発生すると論じている［鷲田　2005: 281］。

鈴木清史・山本誠も、世界各地の民族と衣服の関わりを論じる論考集の序論の中で、真夏にネクタイを身に着け、真冬にミニスカートを着用する現代の私たちの服装を取り上げ、「身体の保護」とは無関係の「他者の視線」が生んだ装いだと述べる［鈴木・山本編 1999: 7］。同時に、民族固有の衣装については、集団に内在する共有の美意識を示しているというだけでなく、衣服を作ったり、着用することで民族集団としての帰属感、すなわち民族的アイデンティティを醸成し、再生産することとつながっているという。その上で、民族衣装は、「他民族からの差別化」という機能を内包していると論じている［鈴木・山本編 1999: 8］。

鷲田、鈴木・山本の論考から、衣服やファッションの議論においては、常に「他者」の存在が意識されていることが伺える。衣服の着用やファッション現象の発生は、社会性を伴うものであり、人が服を着るという行為は、集団への帰属や他者との差別化を示すことにつながっている。

しかしながらこうした既存の衣服やファッションの議論においては、特別の信仰を持つ人々の装いも、「民族意識」や「集団への帰属感」というようなものに還元されて語られてきた。自己と他者、あるいは私と私が属する社会や集団、という簡素化された枠組みの中では、信仰心も「社会的属性」や「帰属意識」に置き換えられてしまうため、人々の持つ信仰心が装いに及ぼす影響は必ずしも明らかにはならないのである。

二つ目は、ムスリマのヴェール着用や装いについて、現代インドネシア社会の事例から説明する切り口である。現在、世界最大のムスリム人口を抱えるインドネシアではあるが、一方で、同地においてイスラームは後発の宗教であり、イスラーム到来以前に根付いていたヒンドゥー、仏教、またアニミズム的宗教観と混淆する形でイスラームが根付いていった。それゆえに、インドネシアのイスラームは、中東で実践されるイスラームと異なって、他の文化や宗教も包含する「寛容なイスラーム」であると考えられてきた。しかしながら、1960 年代後半から 30 年以上続いたスハルトの権威主義的体制下では、1980 年代以降、教育を受けた都市部の若い女性たちの間で、ヴェール着用者が出現した。スハルトは、個人の信仰としてのイスラームは許容したが、政治的に伸長するイスラーム勢力は政権に対する潜在的危険勢力と見なして警戒し、徹底的な監視と必要に応じた弾圧を加えた。一方で、識字率や教育水準の高まり、出版技術の向上などを背景に、翻訳されたクルアーンや宗教関連書を読み、イスラームを学ぶ若者たちが現れ、こうした若者たちの間で、ヴェールを着用する女性たちが出現したのである。若い女性たちのヴェール着用は、個人の信仰の域を超え、政権の安定を脅かす危険な兆候と見なされた。1982 年〜 1991 年には公立の学校でヴェール着用を禁じる政策が実施され、その後もヴェール着用者に対する当局の警戒と社会的圧力は続いたが、1998 年以降の民主化の時代には、イスラームが以前に比べ、社会の様々な側面で人々に受け入れられるようになり、ヴェールを着用する

女性たちも急増している。筆者は、特に都市部に暮らし教育を受けた若い女性たちが、ヴェールやムスリム服を着用し始めるという現象に関心を持ち、10 年以上にわたり調査を続けている。

これまでの調査や研究の成果をまとめた 2015 年の拙著［野中 2015］では、1980 年代以降のインドネシアのムスリマのヴェール着用現象に大きく二つの流れがあったことを示した。一つは、スハルト時代から続く大学生たちのダアワと呼ばれるイスラーム運動に参加する女子学生を中心とする流れである。ダアワは、アラビア語で「呼びかけ」を意味する単語であるが、インドネシアの文脈では「イスラームへの呼びかけ」を意味し、自らがイスラームを学び実践しながら、他のイスラーム教徒に対し、より良いイスラームの信仰と実践を呼びかけるものである。スハルト権威主義体制下の 1980 年代以降、インドネシア大学など国内屈指の一流大学を拠点に、学生たちがイスラームを学び、呼びかけ、結果としてイスラームに基づく社会改革の実現を目指すこのダアワ運動が広まっていった。ダアワ運動では、自らがイスラームを学び、より良いムスリムを目指すことが基本である。一般に学生たちは、メントリングやリコと呼ばれる小グループ[5]での勉強会を自分たちで開催し、定期的にイスラームを学んだ。ダアワ運動に参加する女子学生たちの多くは、こうした小グループの勉強会でイスラームを学び、ヴェール着用がムスリマの義務だと知って、着用を始めたのである。

インドネシアでは以前から、成人した女性たちの正装としてヴェールを頭に羽織る伝統があり、同時に、ヴェールの着用は、メッカ巡礼[6]を済ませた女性たちのシンボルとしても知られていた。この種のヴェールは「クルドゥン」と呼ばれてきた。しかしながらクルドゥンは、頭を緩やかに覆うだけのものであり、髪の毛や耳、首筋などが完全に隠されはしないし、たとえメッカ巡礼を済ませていたとしても、クルドゥン着用者たちがイスラームの教えに自覚的かどうかも定かではない。ダアワ運動に参加した女性たちは、自らの着用するヴェールを、それ以前の「クルドゥン」とは区別して「ジルバブ」と呼び始めた。「ジルバブ」は前述のクルアーン部族連合章 59 節で「長衣」を指す単語である。女性たちは、クルアーンを読み、内容を理解し、受け入れた上でヴェールの着用を始めたのであり、クルアーンの記述に自覚的であることを示すため、クルアーン起源の「ジル

写真 1　ジルバブ
（2007 年 12 月、筆者撮影）

5 小グループは、男女別で、一人のリーダーと 5 ～ 10 人程度のメンバーで構成される。週 1 回 2 時間程度、モスクやリーダーの下宿などを会場に、車座になりインフォーマルな形式で行われる勉強会である。通常は、年長のリーダーがメンバーである後輩を指導する［野中 2010: 39］。

6 イスラーム教徒が実践しなければならない 5 つの義務（5 行）の中の 5 番目のもの。経済的にも肉体的にも、時間的にも負担が大きいため、それを行う能力がある人だけに課される義務とされている。

バブ」を用いたのである。「ジルバブ」のクルアーン上の意味が「長衣」であることも十分に理解されていたのであろう。この時期の女性たちの装いは、ヴェールを被るだけでなく、全身を覆うゆったりした「長衣」と呼べるものだった（写真 1）。

もう一つの流れは、スハルト体制崩壊後の 2000 年代以降顕著になった、より「ファッショナブル」なヴェール着用の流れである。民主化や経済発展が進展する中、ある程度自由に使えるお金を持ち、ファッションを意識した若いムスリマたちが担い手となった。「ジルバブ」が持つ、やや排他的でお堅いイメージを払しょくするため、「ジルバブ」に代わって 2010 年頃からは「ヒジャーブ」という用語が、こうした女性たちによって、好んで使われるようになった。「ヒジャーブ」は、そもそも「カーテン」や「隔離」を意味するクルアーン起源の単語である。中東アラブ地域でイスラーム教徒の女性が身に着けるヴェールは一般に「ヒジャーブ」と呼ばれている。インドネシアでは近年、社会のイスラーム受容に伴い、特にイスラーム関連の用語に対し、既存のインドネシアの単語ではなく、アラビア語起源の外来語を使って表現することが急激に増加しており、女性のヴェールを「ヒジャーブ」と呼ぶことも、こうした流行の一つと見ることができる。ヴェールの形や巻き方も、正方形の布を半分に折り、顔に沿って身に着ける形式から、インナーを身に着けて、その上に薄手のスカーフを巻いていく形式へと大きく変化を遂げている（写真 2、3）。インナーは一般に、頭から鎖骨の辺りまでの大きさであるが、これによって、イスラームの教えで最低限覆う必要のある頭髪と耳と首筋を隠すことが可能となる。よって外に巻くアウターは、より自由にクリエイティブにアレンジすることができるのである。ヴェール着用者の増加と共に、先述のクルアーンに照らしたムスリマの服装の条件に合致する服に対する需要も増大し、ムスリム服デザイナーが出現して、様々なムスリム服が製作され、販売されるようになった。ヴェールの呼び名も着用する女性たち自身の意識に呼応し、クルドゥンからジルバブ、ジルバブからヒジャーブへと変遷を遂げてきた。

写真 2、3　インナーを付けたヒジャーブ
（写真 2　2013 年 3 月、筆者撮影／写真 3　2014 年 2 月、筆者撮影）

現在では、民主化後 18 年が経過し、ヴェールとムスリム服の着用の必要性が社会に広く認知され、着用者が社会のマジョリティになり始めている。2015 年の拙著では、過去 30 年ほどの女性たちのヴェール着用現象を、インドネシアの社会的・政治的変容の中に位置付け、その変遷や社会的意義を論じた。一人一人の女性たちのヴェール着用に至るプロセスや意識も詳しく論じたものの、これは 2004 年の調査に基づいたものであり、それからすでに 10 年以上が経過している。以前の研究を踏まえ、現在の女性たちのヴェールやムスリム服に対する意識を考察することは、インドネシア社会におけるイスラームの地位や信仰実践の変化を知る上でも大きな意味を持つ。

三つ目に、本稿では日本に暮らすインドネシア人ムスリマたちの意識も考察の対象とするため、日本に暮らすイスラーム教徒たちのヴェール着用について、先行研究の論点を整理しておく。2003 年の桜井啓子の著作は日本のムスリム社会に関する先駆的な研究と呼んでいいであろう。この中で桜井は、日本に在住するムスリムの数は、年々増加しているものの、2000 年の時点で外国人ムスリム、日本人ムスリムを合わせて約 7 万人程度であると論じ［桜井 2003: 37-38］、「宗教的マイノリティー」として彼らがどのように日本で暮らしているかを紹介している。日本に暮らすムスリマたちにとっては、日常の装いであるヴェール着用が、人目に付きやすく目立ちやすいという点で、礼拝、食事、断食以上に大きなハードルとなっていることが指摘されている［桜井 2003: 196-197］。

IS に代表されるテロリズムに関するニュースのインパクトのみならず、昨今の急激な訪日ムスリム観光客の増加、イスラームで禁じられた利子を排しイスラームの教えに基づく金融取引を実行するイスラーム金融や、イスラームで禁じられた豚由来・アルコール成分を含むことなくイスラーム教徒が食することのできるハラール食品への対応などイスラーム教徒をターゲットにするビジネスへの期待によって、日本でのイスラームへの関心や注目は確実に高まっている。こうした事情を背景にして、2015 年には、日本におけるイスラーム教徒の歴史や生活の様子、彼らの意識を論じる小村明子と佐藤兼永の著作が著された。イスラーム式のヴェール着用について、著作の中で佐藤は、外国人イスラーム教徒であれば、あまり問題なくその着用が認められ、許される雰囲気があるのに対し、日本人ムスリムは周囲から特別扱いされることが少なく、ヴェールも非常に着用しづらい状況にあると論じている［佐藤兼永 2015: 67］。同様に、小村も、日本社会の中で、日本人ムスリマにとって最も勇気がいるのは、「ヒジャーブ（ヴェール）」を着用することだと論じた新聞記事を紹介している［小村 2015: 109-110］。その上で、複数の日本人ムスリマのヴェール着用の事例を挙げて、日本における多様なイスラームの実践のあり方を提示した。小村によれば、こうしたムスリムやムスリマの多様な生き方は、各人の置かれた社会環境や社会的立場の違いに加えて、各人のイスラームに向かう姿勢の違いによって生じると論じている［小村 2015: 127］。

これまでの研究成果では、日本においては、日本人ムスリマが周囲や日本人社会との軋轢によって生きづらさを感じることが多いのに比べ、外国人ムスリマは、そもそも特別と認識され、ヴェール着用を含む様々な信仰実践が許容される場合が多いことが論じられてきた。

本稿では、上記の先行研究の成果を念頭に置きながら、インドネシアと日本に暮らすインドネシア人女性たちに対してインタビューを実施し、彼女らのヴェールやムスリム服に対する意識、着用実践のあり方を考察していく。調査の対象としたのは、インドネシアと日本に暮らす 20 代〜 30 代の 5 人の女性たちであり、全員が、大学学部卒以上の学歴を有する[7]。筆者は、2004 年から継続してこの層の女性たちを対象に調査を続けてきており、今回も、同じ年齢層、学歴の女性たちに話を聞いた。これにより、これまでの調査結果との比較が可能になり、異なる時期における女性たちの意識の変遷や、彼女たちが暮らす社会のイスラーム受容の変化を記述することも可能になると考えた。インタビューは、直接対面式で実施したインフォーマル・インタビューである[8]。ヴェール着用の時期や、着用に至るきっかけ、ヴェール着用を続ける上での困難など、事前に設定したいくつかの質問は念頭に置きながら話を進めてはいるものの、インタビューの進行はそれぞれの会話の流れに任せた。本稿で着目する女性たちのヴェールや服装に対する意識や信仰実践のあり方は、個人のプライベートや内面に深く関わる問題であり、1 回きりの限られた時間の中でのフォーマルなヒアリングでは、答えを引き出すことは非常に困難である。有効な内容を引き出すためには、調査者である筆者が彼女たちに信頼してもらうことが大前提である。以下に紹介する女性たち 5 人の話は、主に、ジャカルタおよび東京で 2016 年 8 月から 9 月にかけて実施した、各人へのインタビューに基づいている。しかしながら、筆者はそれ以前にも、各女性たちと、それぞれ複数回の面会を重ねており、メインのインタビュー実施時までに、すでに友好な関係を築いていた。本稿は、彼女たちとの雑談も含め、打ち解けた雰囲気の中で出てきた女性たち自身の声をまとめたものである。なお、5 人の女性の名前は、人物が特定できないよう、仮名を用いることとする。

2　インドネシアのムスリマたち

2-1　プトリ（*Putri*）

プトリは、ジャカルタ生まれのジャカルタ育ちで、3 人姉妹の長女である。現在、私立のイスラーム系ビジネス学校に勤務し、広報とマーケティングの仕事を担当している。

ヴェールを着用したのは、2008 年、高校 3 年生の卒業間近の頃だった。母は、以前からヴェールを着けていたが、娘たちにヴェールを着けなさいと強要したことはない。プトリが高校に入った頃、「大学生になったら着けてみたら」と言われたのを、彼女は覚えている。幼稚園と小学校の頃[9]、近所の子供たちと一緒に地域の子供向けプガジアン（イス

7 インドネシアの大学就学率は、29.15％（インドネシア共和国国家教育省資料 2014 年度統計）。
8 インフォーマル・インタビューの手法、効用については、［佐藤郁哉 2015: 164-182］に詳しい。
9 インドネシアは、日本と同じ小学校 6 年、中学校 3 年、高校 3 年、大学 4 年の教育制度を有する。男女共学の学校がほとんどである。中等・高等教育では、私立に比べ公立学校の方が優秀な学生を集める傾向が続いているが、近年は、英語教育やイスラーム教育を重視する特色ある私立学校も人気を集めている。

ラーム勉強会）に通い、礼拝前のウドゥ[10]の仕方や、子供向けイクロ方式[11]によるクルアーンの読み方を勉強した。中学に入るとプガジアンには通わなくなり、学校で教えられる科目としての宗教の授業が唯一、イスラームを学ぶ場となった。でも内容はほとんど覚えていないし、イスラームの教えについての勉強は、ほとんどしていないと言う。ヴェールの着用について教えてくれる人は誰もいなかったから、ヴェール着用がムスリマの義務だということ自体、高校に入ってからも、はっきりと認識してはいなかった。

プトリが初めてヴェールの着用を意識したのは、大学受験を目指して高校2年生の頃から、勉強塾のヌールル・フィクリ（Nurul Fikri）に入って以降のことだ。ヌールル・フィクリは、大学ダアワ運動で1990年頃から主流となったイスラーム学習の潮流、タルビヤ[12]で学ぶ学生たちが、後輩を育てる目的で創設した学習塾であり、1990年代後半から2000年代にかけ、ジャカルタを中心に多くの優秀な高校生を集めた。インドネシア大学など難関大学への合格の実績も豊富で、プトリの周囲でも非常に評判がいい塾だった。難関大学への合格実績と共に特徴的だったのは、イスラーム的教育にも力を入れていることであり、一般教科の教育と共に、子供に対するイスラーム的教育も重視する人々が増加したジャカルタにあって、大きな人気を集めていた[13]。塾講師を務める大学生たちの多くが、インドネシア大学の現役学生だったが、皆、敬虔なイスラーム教徒であり、授業のはじめには、イスラーム式の祈祷を皆で唱え、各講師は、授業の中にも、イスラームの教えを含ませて話をした。女性講師は皆、ヴェールを着用しており、女子生徒たちにも、塾に来る時には、ヴェールを着用してくることが強く推奨されていた。プトリは、ヌールル・フィクリに入塾して初めて、ヴェール着用がムスリマの義務であるということをはっきりと理解し、「自分もいつかは、ジルバブを着けなければならないのだ」ということを意識した。そしてジルバブを着ける練習をする良い機会だと感じ、週に2回、塾に通う時だけはジルバブを着用するようになった。

高校卒業が間近に迫ったある日、塾から家に戻り、洗面所でジルバブを外そうとした時、なぜだかわからないけれど、とてつもなく恥ずかしい気持ちになった。ヌールル・フィクリに通い始めた当初は、塾に行く時だけのジルバブ着用であっても、非常に暑く、とても着け続けられないと思ったのに、外すのが恥ずかしく思うとは、本当に不思議だった。でも、これがヒダーヤ[14]なのだと感じ、その日から、日常的にジルバブを着け続け

10 ウドゥとは、礼拝の前に行う一定の作法に従った清めであり、礼拝を有効とするための条件である。
11 イクロは、インドネシアで開発されたクルアーン読誦のためのアラビア語速習法であり、1990年代以降、子供たちのための画期的なクルアーン学習法として、全国に広まった［中田 2005: 36-37］。
12 アラビア語で「教育」を意味するタルビヤは、インドネシアの大学ダアワ運動における一潮流であり、小グループでのイスラームの学び合いを基礎とする。1980年代以降に出現し、1990年代には、全国に展開していった［野中 2010: 25-28］。
13 ヌールル・フィクリは、タルビヤの側から見れば、優秀な高校生たちを大学入学後にタルビヤの活動に参加させる効率的なリクルートの場としても機能した。1997年から1998年のデータでは、インドネシア大学に入学した学生のうち4人に1人は、ヌールル・フィクリの卒業生だったという［Damanik 2002: 152-157; Furkon 2004: 134-135］。
14 ヒダーヤとは、「神の導き」を意味するアラビア語起源の単語。ヴェールを着用し始めた女性に対する筆者のインタビューでは、ヴェール着用の直接のきっかけについて、しばしばこの「ヒダーヤを得た」という表現を使って説明がなされている［野中 2015: 104］。

ることに決めた。

2008年にインドネシア大学の人文学部日本語学科に入学したプトリは、ジルバブを着け始めたばかりだということもあり、より良いムスリマになりたいという気持ちがあって、同学部の学生ダアワ組織フォルマシに参加し、メントリングにも参加して、日常的にイスラームを学ぶようになった。入学当時のプトリのジルバブは、首が隠れる程度の小さいものだったが、フォルマシで活動し、同時に、週1回のメントリングに参加するようになり、結果、胸まで隠れる大きさになった。それ以前には、着用が楽なインスタント式のヴェール[15]を着けることが多かったが、この頃から、白や灰色など、地味な色の正方形の布を半分に折って三角形にし、額から顔に添わせてあごの部分をピンで留めるジルバブ型のヴェールを着用するようになった。着用するヴェールの形や大きさの変化は、フォルマシやメントリングに共に参加する先輩や友人の影響が大きかった。現在では、学生たちは様々なSNSを通じてイスラームを学ぶ機会があるが、当時はまだ、フォルマシのような組織で活動しなければ、実際にイスラームに触れ、学ぶ機会を持つことはできなかった、とプトリは当時を振り返っている。

大学卒業後、イスラーム系大手新聞のソーシャル・メディア部門で2年間働いた後、現在のイスラーム系ビジネス学校に転職し、広報とマーケティングを担当して2年目になる。大学時代には、全くメークには興味がなかったが、現在は、外部の人たちに会って、学校をプロモーションする仕事に就いていることもあり、以前よりも、ずっと自分の身なりを気にするようになった。華美になりすぎなければ、イスラームの教えに照らして少しのおしゃれも許容されると考えているから、最近は、ベースメイクとファンデーション、口紅を着けて仕事に通っている。これくらいのメークをした方が、より健康的に見えるし、初対面の人にも好印象を与えることができると考えているからである。一般的には、ナチュラルメークと呼べるものだが、ハラールマークの付いた化粧品を選んで使っている。また現在のヴェールは、大学時代よりもカラフルになった。花柄のヴェールを着けることもある。インナーを被り、その上から薄手の長いショールを巻くことが多い。

大学を卒業し、就職して忙しくなった現在でも、時間が許す限り、週1回開催される小グループのイスラーム勉強会には参加している。その意味で、プトリは、今でもタルビヤ[16]の一員であり、自分のことをウフティ（*ukhuti*）とかアフワ（*akhwat*）と呼ぶ。ウフティとかアフワという用語は、タルビヤに参加している女性たちが自分たちのことを呼ぶ自称

15 ヴェールとして身に着けられるようにすでに裁断され、縫製されており、顔を出す部分は、くりぬかれて、かがられた状態になっている。通常は、正方形や長方形の布を頭に巻いていくため、安全ピンやブローチで留めて着用する必要があるが、このインスタント型は安全ピンやブローチを用いる必要がなく、着用にかかる時間も非常に短いため、毎日の身支度の時間と手間を短縮したい女性たちには人気がある。

16 1998年スハルト体制崩壊後、タルビヤのメンバーたちは新しいイスラーム政党正義党（2002年に福祉正義党に改名）を創設し、2000年代には都市部を中心に選挙で多くの票を集めて、一大政治勢力となった。2000年代後半以降、党内の内紛や幹部党員らのスキャンダルが表面化し、ダアワの活動を実践することで同党を支持してきた学生や卒業生たちの政党離れを招いたが、現在でもダアワ運動に参加する都市部の学生たちからは一定の支持を集めている。プトリも、福祉正義党の党員ではないが、同党にシンパシィを感じている一人である。

である[17]。しかしながら最近では日常的にメークをしており、おしゃれにも気を遣うようになった。そこで、自分のことをウフティ・ソシアリサシ（*ukhti sosialisasi*）と呼ぶようになったという。「社会化したウフティ」、つまりタルビヤに参加し、イスラームを学び続けながらも、ファッションを通じて、タルビヤのメンバーやダアワの活動家以外の人たちとも共通する意識を持つ女性、というような意味である。

また同時に、プトリは、最近SNSのインスタグラム（Instagram）上で「ヒジャーバーズ・シャリイ（*hijabers syar'i*）」と称する女性たちの投稿を頻繁に目にするようになって、彼女たちの服装に親近感を覚えるようになった。ヒジャーバーズは、2010年頃から、より現代的なおしゃれを楽しみながら、イスラームの教えに適うヴェールを着用することを目指し、社会的活動を展開してきた若い女性たちの自称である。彼女たちは、自らの身に着けるヴェールに対し、「ジルバブ」ではなく「ヒジャーブ」という単語を採用し、それを身に着ける人たちということで、英語の接尾辞「-ers」を付けて、自分たちを「ヒジャーバーズ（*hijabers*）」と呼んだ。それ以前のジルバブ着用の流れとは決別し、ヴェールやムスリム服をイスラームの教えに適いながら、ファッションとして楽しむことが可能であるとして、SNSやその他メディアを通じて、様々なヴェールの巻き方や服装を提示していった。ヒジャーバーズの服装や活動については、行き過ぎだとか、イスラームの教えに適っていないとして批判する人々もいるが、それまでのジルバブに対するやや排他的でお堅いイメージを払拭し、社会の広い層にヴェールやムスリム服着用を広めることに成功したという点で、社会的な影響力は非常に大きかった。プトリは、そのヒジャーバーズの服装については、やや行き過ぎだと感じてはいるものの、自分自身も、おしゃれに気を遣っていることを自覚している。それゆえに「ヒジャーバーズ・シャリイ」、つまり「シャリーア[18]的なヒジャーバーズ」という用語を使って、イスラームの教えに従うヒジャーバーズ、という風に表現する女性たちのインスタグラムの投稿は、彼女にとって非常に新鮮だった。プトリは、自らの服装の参考にするため、インスタグラムで「ヒジャーバーズ・シャリィ」たちの投稿や写真をチェックするのが日課になっている。

プトリにとってヴェール着用は、ムスリマとしての義務であり、着用することで、他の人に自動的にムスリマだと認識されるという点で、自らのアイデンティティを表明する手段でもあるという。同時にプトリは、ヴェールを着用することでアッラーを感じてもいる。「アッラーは、私を創造してくれた神で、最も慈悲深く、愛情深いお方である。私は神を見ることができないが、神はもちろん私を見ることができるから、できる限り、神の

17 ウフティとアフワは、アラビア語起源の単語であり、そもそもは、「姉妹」を意味する。ウフトゥは単数形であり、アフワは複数形である。一方で、タルビヤに参加する男性は、自分たちのことをアラビア語起源で「兄弟」を意味するイフワン（*ikhwan*）と自称する。

18 シャリーアとは、イスラームの聖典クルアーンや預言者ムハンマドの言行であるスンナから引き出される法規定であり、一般に「イスラーム法」と訳される。西欧法が対象とする範囲を超え、人間の社会生活のすべてが包摂されるという特徴を持つ（『岩波イスラーム辞典』「シャリーア」の項参照）［大塚他編 2002: 466］。本稿のテーマに即して言えば、ムスリマの装いに関しても、「シャリーア的」かどうか、「シャリーアに適うかどうか」は、信者一人一人にとって重要な事柄である。

シャリーアに従う形でジルバブを着けたいと思っている」プトリにとってのジルバブ着用は、いつでも慈悲と愛を与えてくれるアッラーに対する恩返しの意味も持っているのである。

写真 4　サンディ
（2013 年 3 月、筆者撮影）

2-2　サンディ（*Sandi*）

インドネシア大学人文学部ドイツ語学科を 2 年前に卒業したサンディは、2013 年頃から継続して、トラベル・ヒジャーバー・ブロガーと称して各地を旅し、SNS を通じて、その内容を発信し続けている。また、2016 年度には、ジャカルタ近郊のタンゲラン市の観光大使の一人に選ばれ、地方政府の下で地域を PR する活動に携わっている。

サンディがヴェールを着用し始めたのは、小学校 6 年生の時だった。2005 年のことである。当時は、私立のイスラーム系学校に通っていたため、学校では、ヴェールの着用が義務付けられていた。それ以前には、学校から帰宅した後と、週末にはヴェールを着けない生活だったが、結局いつかは着けることになるのだから、先に延ばしている意味はないと感じ、小学校 6 年生で、日常的に着用し始めた。ちょうど、初潮を迎えた頃で、大人の女性の身体になっていく時期だった。10 代になり、友人たちがヘアスタイルや髪飾りにお金を使うのを目の当たりにし、ばかばかしいとも思い始めていた。ヴェールに対する社会の偏見があるのも感じており、だからこそ、「ヒジャーブを着けていてもすごい女性になれる」ということを皆に見せてやりたい、と思う気持ちもあったという。

ジャカルタの西隣に位置するタンゲラン市で小学校まで育ったサンディだったが、中学・高校時代は、ジャカルタ南隣に位置するボゴールの学校で過ごした。そのため、中学 1 年生の時から、親元を離れ、下宿生活を続けている。弟と 2 人姉弟で、サンディが高校生の時、両親は離婚した。父は、母と離婚した後に、病気で亡くなっている。父が亡くなっても、私たち家族がそれほど悲しまないようにと、神様が私に中学時代から一人暮らしをさせて自立させ、両親に離婚という道を選ばせたのかもしれないと、サンディ自身は考えている。

母はシングルマザーになった後も、公務員として働いている。ジルバブの着用が禁じられていた 1980 年代[19] に青春時代を過ごした母は、社会人になって初めてジルバブを着けた。職場でも、ジルバブ着用者は少数派で、上司に呼ばれていろいろと聞かれた経験を持つという。サンディが物心ついた時にはすでに母はヴェールを日常的に身に着けていたが、娘のサンディにヴェールの着用を強要することはなかった。「あなたの心の準備がで

19　教育文化省初等・中等教育長官決定「制服規定」により、1982 年から 1991 年の間は、公立学校でのヴェール着用が実質的に禁止されていた［野中 2015: 33-44］。

きた時に着けなさい。まだ準備ができていないのであれば、着けてはいけない」と、そう言われてサンディは育った。

中学、高校と常にトップクラスの成績を維持したサンディは、1年飛び級して17歳の時にインドネシア大学人文学部ドイツ語学科に入学した。大学時代には、仲間と一緒にインドネシア大学のヒジャーバーズのグループを立ち上げ、学内でヒジャーブとイスラームに関わるイベントを実施したり、インスタグラムやツイッター、フェイスブックなどのSNSを通じて、ヒジャーブを広める様々な発信を行ってきた。卒業後、母は娘が安定した職業に就くことを強く希望したが、サンディ自身は、「ヒジャーバー」として、また社会活動家として、社会に対して良いインスピレーションを与える存在であり続けることを望んだ。ヒジャーブを着けたトラベル・ブロガーとなり、各地を旅してブログで情報発信しつつ、タンゲラン市の観光大使コンテストに応募したのも、こうした思いを実現するためである。子供の時代から一貫しているのは、ヒジャーブを着けていても、様々なチャレンジができること、アクティブでいられることを、色々な手段を使って、社会に提示していきたいという思いである。

3　日本に暮らすインドネシア人ムスリマたち

3-1　ブンガ（Bunga）

現在、都内の国立大学の博士課程に所属し、博士論文執筆中のブンガが初めて日本に来たのは、1995年、高校2年生の時だった。高校の交換留学生として東京でホームステイをしながら公立高校に通い、1年を過ごした。当時、ブンガはすでにジルバブ着用者だった（写真5）。

彼女がジルバブを着用し始めたのは、1993年、中学校3年生の時だ。具体的なきっかけがあったわけではないと言う。ラマダン月のある日、礼拝をしている時に何かを感じて、ジルバブの着用を決めたのだ。ヒダーヤというものがあるならば、これはヒダーヤだとしか言いようがない。当時は、母も姉も、親戚も、誰もジルバブを着けておらず、家族や親族の中でブンガが最初の着用者になった。

写真5　ブンガ
（2016年8月、筆者撮影）

ブンガの家庭は、「宗教的ではない」。父は警察官で、どちらかと言えばリベラルな思想の持ち主だった。家族でラマダンはしたけれど、礼拝はあまり熱心ではなかったし、父は時にはお酒も飲んだ。ジルバブを着け始めた時、「なぜジルバブを着けたんだ？イスラーム過激派グループの仲間になったのか？」と言われ、反対されたが、最終的にはブンガの自由にさせてくれた。

小さい頃から外国に行きたいという夢を持っていたブンガは、高校2年生の夏、日本への留学プログラムの選考に合格し、1年間、日本に来ることになった。夢が

叶ってとても嬉しかったが、ジルバブを着けて日本に行くことに対し、躊躇する気持ちもあったという。すでに日本で1年間を過ごし帰国していた先輩たちからは、「日本人はジルバブ姿に慣れていないから、絶対多くの人たちから見られることになるけれど、それでも大丈夫か？」と何度も聞かれた。

日本で通ったのは、都内の公立高校で、制服の着用が義務付けられていた。ホストファミリーに助けられ、高校側の理解が得られて、ブンガは白い無地のジルバブを着用したまま登校することが許された。学校の制服の膝丈スカートや夏服の半袖シャツは、イスラームの教えに沿わないため、制服に似た素材と色のロングスカート、また夏服用に長袖の白シャツを購入し、それを着て学校に通った。学校では、もちろん一人きりの留学生ということで目立ってはいたが、ブンガがイスラーム教徒であること、宗教の教えに従ってヴェールを着けなければならないことを、担任の先生が事前に同級生たちに話してくれていたので、嫌な気持ちにさせられることはなかった。大きな試練だと感じたのは、学校の行き帰りや、外出時である。1995年の東京では、外国人を目にすることはほとんどなく、日本人は、現在に比べて、ずっと排他的だったとブンガは回顧する。外出するたびにジロジロ見られるのは当たり前で、それは我慢できたが、時には、蔑んだり、敵のような目で見られることもあった。ちょうど、オウム真理教による地下鉄サリン事件が起きた直後で、オウム真理教の人たちの纏う白くて長い服装に、ブンガのジルバブ姿が重ねられていたのかもしれない。通りすがりに、「なんだ、その格好は」と言われたこともあるし、「オウム！」と叫ばれたこともある。当時まだ16歳だったブンガは、見ず知らずの人に、面と向かってひどい言葉を浴びせられ、ふさぎ込むようになったと言う。何も悪いことをしていないのに、日本人に嫌われたり、憎まれたりしていると感じるようになっていた。ジルバブを外してしまった方が楽だと思うことも、たびたびあった。

しかしブンガは、毎日の出来事を日記に書くことが習慣だった。その日記に自分の気持ちを綴ることで、気持ちを整理することができるようになっていった。自分の信仰心からジルバブを着けることを決意したのだから、イスラームを理解しない人たちに少しくらい誤解されたり、悪口を言われたりしたからと言って、自分が信じていることを手放してはいけない、と心に決めた。その時から今に至るまで決心は継続し、ジルバブを着け続けている。

そういうわけで高校時代の日本での1年間は、良い思い出ばかりではない。日本を嫌いだと思ったこともたびたびある。なぜ日本の社会は排他的なのか、日本人も少しはイスラームのことを勉強してほしい、と思っていた。しかし、日本での1年を終えて帰国し、インドネシア大学社会政治学部コミュニケーション学科に入学して、勉強するようになってから、ブンガの意識は少しずつ変わっていった。文化が違う人同士、どうしたら理解し合えるのか、ということを研究したいと考えるようになった。修士課程に進むことを決め、再び日本で学ぶ機会を得たのである。再来日は2007年。都内の国立大学の大学院修士課程に入学した。高校の時以来10年余りの間に、日本人のイスラームに対する知識は各段に向上したように感じた。「私のジルバブは、依然として多くの日本人にとって奇妙だったと思うけれど、その見方は、以前とは大きく異なっていた。偏見に満ちたものでは

なくなっていた」とブンガは振り返る。

高校時代の辛かった経験があるので、ヴェール着用も含め、イスラームを実践することに対して、今の日本では、ブンガはほとんど問題を感じないと言う。日本社会の状況が大きく変化したのだと、ブンガは強く感じている。

現在のブンガの日々の服装は、日本で購入したものばかり。ショップやオンラインサイトで売られている一般の服も、長袖・ハイネックのインナーを着て、重ね着すれば、イスラームの教えに沿うことができる。ブンガによれば、服装に関するインドネシア人の考え方は、ムスリムの中でも非常にフレキシブルだと言う。ジーンズやシャツなどは、そもそも西欧発の服装だが、イスラームの教えに適うよう工夫して着ることができる。日々のヴェールでさえも、日本で売っている普通のスカーフを、インナーと合わせて着けている。夏に日本で売られているスカーフは、ジルバブにちょうど良いとブンガは言う。また、以前はインドネシアに帰ると、ムスリマ向けの雑誌を購入したりもしていたけれど、今は、ファッションの情報もSNSを使ってチェックしている。日本に暮らしていても、インドネシアや世界各地の情報を集め、リアルタイムで確認することができるので、非常に便利な時代になったと感じている。

ブンガにとって、ジルバブはアイデンティティの一つであり、自分自身の一部である。彼女はアッラーを愛しているし、アッラーが喜んでくれることをしたいと思っている。アッラーは世界のすべてを掌握し、目に見えない小さな原子の動きでさえも、また人間一人一人の心の動きでさえも知っていて、彼女も含め、世界のあらゆる物を創造してくれたお方である。「私は、これまでに、たくさんの罪[20]を犯してきたし、これからも神の意に背くこともしてしまうかもしれない。だから、ジルバブの着用くらいは、どこに暮していても、きちんとしようと思う」。日々の生活の一瞬一瞬に神の存在を意識するから、ブンガはジルバブを着けているのである。

3-2　サキナ（*Sakinah*）

2000年4月、大学に入学するために来日して以来、16年以上、サキナは日本に暮らしている。都内の国立大学で修士課程まで修めた後、留学生仲間のインドネシア人男性と結婚して、一男一女に恵まれた。ヴェールを着用し始めたのは、来日後1年ほど経った2001年で、それ以来、着用を続けている。現在は、子育てをしながら、複数の大学で、非常勤教員として教鞭をとっている。

サキナは、国軍所属の軍医の父と看護婦の母のもとに生まれた長女であり、妹と二人姉妹である。軍医だった父の配属に伴い、幼い頃は、インドネシア各地を転々とし、たびたび転校をせざるを得なかった。クルアーンの読誦を勉強するため、両親は家庭教師（グル・ンガジ：*guru ngaji*）を雇ってくれた。でも、この先生は、クルアーンのアラビ

20　ブンガが言う「罪」とは、一般の法律に反する罪悪とは異なり、神の命令や導きに反する行為という意味である。

ア語での読み方を教えてくれるだけで、イスラームの中身を教えてくれたわけではない。ヴェールがムスリマの義務だということも、教わった記憶はない。

高校は、ジャカルタの公立高校に入学した。ジャカルタでトップクラスの進学校だったが、校内にモスクがあり、生徒たちのイスラーム活動も活発だった。生徒たちの多くが、金曜の昼休みに実施される小グループでの勉強会、メントリングに参加していた。インドネシア大学などに通う同高校の卒業生が、リーダーになり、生徒たち 10 人程度の小グループを組織して、車座になってイスラームを定期的に学ぶ勉強会である。サキナも、友達と一緒に、あまり深く考えることもなく、この勉強会に参加した。サキナによれば、ヴェール着用がムスリマの義務だということを初めて学んだのは、この高校時代のメントリングを通じてのことである。勉強会に参加して、イスラームの勉強を続ける中で、ジルバブを着け始める生徒もいたけれど、サキナは、「まだ心の準備ができていない」という気持ちだったという。

1999 年 6 月に高校を卒業し、インドネシア大学医学部に進学したが、その後、日本の文部科学省の奨学金選考に合格したので、インドネシア大学を退学して、2000 年 4 月に来日した。1 年間、大阪で日本語を学んだ後、都内の国立大学の理学部に入学し、化学を専攻した。ジルバブを着け始めたのは、2001 年 8 月。ちょうど、日本の大学の夏休みを利用し、ジャカルタに里帰りしている最中だった。サキナは、直接のきっかけについて、「ヒダーヤだとしか言いようがない」と答えた。日本に暮らし始めて以降も、イスラームの勉強をするため、同時に、インドネシア人同士のつながりを求めて、週末には、有志のインドネシア人たちが主宰するリコに通っていた。そこで継続的にイスラームを学び、同じインドネシア人ムスリム同士で信仰心を確かめ合う中で、ジルバブ着用への思いが強まっていったのかもしれないと、サキナは振り返る。当時、母は国軍の看護婦をしており、軍が定める制服を身に着けなければならず、女性のヴェール着用は認められてはいなかった。母がヴェールを着けるようになったのは、退職後のことである。帰省中にジルバブを着け始めた時、軍医だった父は「過激派グループの一員になったみたいだから、やめなさい」とサキナのジルバブ着用を嫌がった。しかし、夏休みはまもなく終了し、日本に戻ってきてしまったので、父も、サキナのジルバブ着用をやめさせることはできなかった。

サキナがジルバブを着用して日本に再来日したのは、2001 年 9 月 11 日アメリカ同時多発テロ事件が勃発した直後のことだった。だから大学に戻ると、日本人の友人たちには、「テロリストかよ」とからかわれた。でも、「幸いなことに」、化学を専攻していたサキナの同級生たちは、ほとんどが男子学生であり、彼らは、サキナのジルバブ姿を、毛嫌いしたり、過剰に反応したりしなかった。サキナによれば、「友達は男子ばかりだったから、女性の服装を必要以上に気にかけない人たちが多かった」のである。

サキナは、細かいことが気にならない性格だと、自分のことを語っている。それが功を奏しているのか、ジルバブ着用後も、日本に暮らしていて嫌な思いをしたことはない、という。もちろん、周りから見られているという視線を感じることはある。しかしサキナは、他人と目が合うと、とりあえずにっこりすることに決めている。目が合ってしまう

と、日本人の多くは、ドギマギして「見て見ないふり」的な反応をみせるのだという。年配の女性の中には、「これ、暑くないの？」などと話しかけてきてくれる人もいるが、そういう時には、チャンスだと思い、日本の年配女性との会話を楽しむことにしている。日本人は、特定の宗教を信じている人が少ないので、アメリカやオーストラリアなどに比べ、イスラームに対するハードルが低いと、サキナは考えている。

サキナにとってのジルバブは、自分のアイデンティティの一部である。また、ジルバブを着けていると、守られているという気持ちにもなるという。例えば、ジルバブを着けないで渋谷を歩くと、変なお兄さんたちからティッシュを配られたり、声をかけられたり、適当に返事を返すと、付け回されることもある。でもジルバブを着けていれば、声をかけられることも、後を付けられることもない。サキナはアッラーがいつでもどこでも自分を見守っている存在だと信じている。アッラーに命じられたジルバブを着けることで、より安全を感じ、アッラーが守ってくれる気がするのである。

一方で、サキナは、日本でジルバブを着用することに対して、ムスリマとしての責任も強く感じている。「ジルバブを着けているから、他人は、一目で私がムスリマだとわかる。私の言動や外見を見て、「イスラーム教徒ってああいう人なのね」と判断されてしまう。私のせいで、イスラームやムスリマに対する日本人の印象が悪くならないように、言動も見た目も、きちんとしなくてはダメだと感じている」とサキナは話した。

3-3　アミラ（*Amirah*）

現在 25 歳になるアミラが日本に初めて来たのは 17 歳の時である。日本の大手総合商社の奨学金を得て、日本の大学に留学するため、バンドゥンの高校を卒業後、すぐに日本にやってきた。都内の私立大学を卒業し、現在では、インドネシア人の友人と立ち上げたコンサル会社のマネージャーを務めている。小学校中学校とイスラーム系の学校に通ったアミラにとって、クルドゥン[21]の着用は幼い頃から、「当たり前」のことだった。日本に暮らしてからも、現在に至るまで、クルドゥンを着け続けている。

アミラによれば、アミラの父方の家系は非常にイスラーム的だという。父方の祖父は、バンドゥンでイスラーム系学校を立ち上げた創設者の一人である。アミラも含め、祖父の孫たちは、皆、幼稚園と小学校の時、そのイスラーム系学校に通った。だからアミラは、幼稚園時代から、制服でクルドゥンを身に着けるという習慣が付いていた。幼いうちは、幼稚園や学校から帰宅すると、クルドゥンを外す、という生活だったが、ムスリマは初潮を迎えたらクルドゥンを着けなければならない、ということを教わり、友人も次々とクルドゥン着用を始めていた。でもアミラ自身は、家族の誰からも強要されなかったし、自ら

21　アミラは、自分の身に着けるヴェールをクルドゥンと呼ぶ。1 章 3 節で論じた通り、クルドゥンは、伝統的にインドネシアで身に着けられてきたヴェールを指す用語であるが、近年、ヴェールを指す様々な用語が出現し、ジルバブがダアワ運動と、またヒジャーブがヒジャーバーズやファッション業界の女性たちとといったように、各用語が特定のグループと結びつけて認識される傾向を見せるようになった。アミラは、自身をどちらにも属さない「中立な」ムスリマだと考えており、ジルバブやヒジャーブよりも「中立な」用語であるクルドゥンを好んで使うと言う。

家でもクルドゥンを着けよう、という気持ちにはならなかった。イスラーム的な父方に比べ、母方の家系はそれほどイスラーム的ではない。アミラの目には、父方と母方の家系でイスラームに対する真剣さが違う、という風に映っていた。しかしアミラが中学2年生の時、母がクルドゥンを着け始めた。母は口数が少なく、自分の心の中のことをほとんど話さないので、何があったかのは詳しくわからないとアミラは言うが、この母の変化が、アミラの心を動かし、翌日には、アミラも学校以外の場所でのクルドゥン着用を始めたのである。

着け始めた当初のクルドゥンは、「すごくダサい」ものだったとアミラは振り返る。彼女がクルドゥンを着け始めた2003年当時、クルドゥンは、「メッカ巡礼を済ませた女性の象徴」だった。クルドゥンを買える場所自体、今と比べて非常に限られていたし、種類や色も本当に乏しかった。アミラも「全然おしゃれな中学生ではなかった」から、白や灰色など地味な色のクルドゥン数枚を、毎日洗っては着て、洗っては着て、という毎日だった。しかしながら、当時、バンドゥンではクルドゥン着用に対する差別的な見方はすでになくなっていた。2005年にアミラが入学した公立高校は、トップクラスの進学校であったにも関わらず、「イスラーム的な雰囲気が強い学校」だった。毎週金曜の朝には、イスラーム活動を主体的に運営する生徒組織のメンバーが、各クラスを巡回して、短いイスラーム的講話を行うなどの行事も日常的だった。1年生の時のクラスでは、クルドゥンを着用しているのは、アミラも含め5人のムスリマ生徒だけだったが、3年生になると、クルドゥンを着ける生徒の数は一クラス10人までに増加した。バンドゥン全体で、ヴェールの着用者が増加していく時期だったと、アミラは回顧している。

来日したのは2008年。もともと「あまり深く悩まないタイプ」だというアミラは、ヴェールを着けるムスリマだけれど、日本に行っても何とかなるだろう、と考えていた。しかしながら、日本に来て初めて、画一的な日本社会にあって、自分だけが他の人と大きく異なるということを、強く自覚した。たくさんの人にジロジロと見られ、多くの人の目に、日常的に晒されているという感覚だった。今まで暮らしてきた環境と異なり、宗教的なところから非宗教的な場所に来て、マイノリティーになったという感覚だった。最初の1年間は、大久保の日本語学校に通い、日本語を学んだ。学校では、たった一人のヴェール着用者であり、電車の中でも、いつも人に見られていた。大学受験をし、2009年に都内私立大学理工学部に入学して以降も、日本人の友達とは、あまり親しくなれなかったと言う。クルドゥンやイスラームのことを、詳しく話す気になれず、自分から日本人との間に一線を引いてしまったのかもしれないと、アミラは振り返っている。日本人の宗教に対するネガティブな考え方を過剰に感じ取ってしまったのかもしれないが、日本人に誤解されたくなかったし、自分のことやイスラームのことを話すのが怖かったと言う。アミラにとっての救いは、大学外でのインドネシア人の友人たちとの交流だった。インドネシア学生協会（PPI: *Perhimpunan Pelajar Indonesia*）の集まりには、積極的に参加した。学生時代には、協会の仲間たちとのイスラーム勉強会にも、頻繁に出席して、イスラームを学ぶと共に、友人との交友を深めた。

日本に来てすでに8年が経つ。日本での生活は、「たぶん、居心地がいいんだと思う。

そうでなければ、もうとっくに帰国しているはず」とアミラは語る。それに加えて、日本社会の変化も強く感じていると言う。アミラによれば、2年ほど前から、急激にクルドゥンを着けたムスリム観光客の数が増加し、日本人もそれを受け入れるようになった。今では、「クルドゥンを着けていても、それほどジロジロ見られることはない」。

アミラのクルドゥンは、ほとんどがインドネシアに一時帰国した際に買ってきたものである。最近は、日本のH&MやZaraで販売されているスカーフをクルドゥン用に買うこともある。一方で、服は、日本で購入したものがほとんどだ。H&Mやユニクロでセールがあると大量買いするし、ふつうの日本人と同じだと言う。学生時代には、「ダサい」服しか持っていなかったけれど、今は、社会人になり、日本人ともビジネスで関わるようになって、ファッションにも興味を持つようになった。ヴェールや服装についての最近のトレンドは、SNSを通じて、特に、インスタグラムでチェックすることが多い。イギリスやデンマークなどヨーロッパ人ムスリマのインスタグラムをフォローし、日々の自分の服装に取り入れている。

アミラにとってのヴェール着用は、当初、宗教的義務を果たすという気持ちだけだった。しかし今では、自分のアイデンティティの一部になっていると感じている。見た目で日本人とは異なっているから、何も話さなくても、日本社会の中で、「ムスリマを代表しているという気持ちになる」し、同時に、この気持ちが、自分自身の行動にも影響を与えると言う。別の言葉で言えば、クルドゥンによって、自分が守られている意識である。クルドゥンを着けているだけで、「たくさんのことを代表してしまっている」から、「変な行動をしたら、インドネシア人ってああいう人たちなんだ、とかムスリマってああいうことするんだと思われてしまう」。こういう意識が、日常を律し、日本人とも友好的な関係を築きながら、一人暮らしの生活を送る手助けをしていると、アミラは考えている。

同時にアミラは、クルドゥンの着用によってアッラーの存在を強く感じている。彼女にとってアッラーは、創造主であり、自分が始まった場所であり、やがて帰る場所である。この世に生じるすべてのことは、アッラーのおかげだと信じている。アッラーがすべての創造物を愛し、慈悲を与えてくれるから、アミラはアッラーを崇拝し、アッラーへの信仰実践を行うという義務を負っていると考えている。アミラにとってのクルドゥンは、自らが神の創造物だということを思い出させてくれるものであり、神への崇拝の気持ちを神に対して表明する手段でもある。

4　女性たちの意識と受容する社会の変化

2章と3章を通じ、インドネシアと日本に暮らす5人のイスラーム教徒の女性たちのヴェールや服装に関する意識や着用の仕方を、インタビューに基づいて整理してきた。彼女たちの話から、昨今のムスリマのヴェールに対する意識や、これを受容する社会の変化はいかに記述できるのだろうか。

2015年の拙著（以下、「2015年拙著」）を踏まえ、都市部の教育を受けた若い女性たちの間でのヴェール着用現象の変遷という観点で見ると、近年では、ヴェール着用に対す

るハードルは確実に低くなっていることがわかる。本稿で論じた 5 人の中では 1993 年にヴェール着用を始めたブンガと、2001 年に着用を始めたサキナが父からの反対にあっているが、2003 年、2005 年、2008 年に着用を始めたアミラ、サンディ、プトリは家族や周囲の反対にあってはいないし、またプトリやサンディのケースのように、母の方が娘よりも先行してヴェール着用者になっているケースも増えている。2015 年拙著では、1990 年代後半以降、ヴェール着用がインドネシア社会に徐々に受け入れられてきた様子を明らかにしたが、本稿でのインタビューでは、2000 年代以降、ヴェールの着用が社会の中でさらに当たり前の光景になってきていることが窺えるのである。女性たちにとってのヴェール着用が、「それまでの自分と周りの環境からの決別を伴う大きな決断」［野中 2015: 79］というほどの大きな事柄だった時代は、もはや過去のことである。

また、2015 年拙著では、1980 年代以降の 30 年間で、ヴェールの呼び名がクルドゥンからジルバブ、そしてヒジャーブへの変化を遂げたことを明らかにした。本稿のインタビューで話を聞いた 5 人の女性たちは、年齢やそれぞれの立場によって、ヴェールに対して異なる呼び名を使用していた。5 人の中では年長で、現在 30 歳代のブンガとサキナは、「ジルバブ」を、またヌールル・フィクリで学び、タルビヤの一員となったプトリも、20 歳代後半であるが「ジルバブ」を使用する。一方、学生時代にインドネシア大学でヒジャーバーズのグループを立ち上げたサンディは「ヒジャーブ」を、またファッションを意識しつつ、ヒジャーバーズの服装はあまり好まないというアミラは、「クルドゥン」を使用している。2015 年拙著では、年代による用語の変遷に注目したが、ヒジャーブの語の出現により、クルドゥンやジルバブの使用が見られなくなったわけではない。女性たちの年齢、ヴェール着用のプロセス、信仰心などにより、現在では、3 つの用語がそれぞれに選択されて使われている状況が明らかになった。

同時に、プトリのようなタルビヤのメンバーが、「ヒジャーバーズ・シャリイ」に親近感を感じ、一方で、ファッションに関心を持つアミラのような女性が、「派手な」ヒジャーバーズの服装よりも、よりシンプルな服装を好む時代である。2015 年拙著では、ヴェールとムスリム服の着用者増加の背景に、1980 年代以降の「ジルバブ」の潮流と、2000 年代に入って以降の「ヒジャーブ」の潮流があることを示したが、プトリやアミラのケースに見るように、現在では、両者の境は極めて見えにくくなっている。

2015 年拙著では詳しく論じなかった新しい傾向として、女性たちがインスタグラムなどの SNS を日常的に利用して、情報発信をしたり、またヴェールや服装に関する情報を得たりしていることがある。サンディは、トラベル・ブロガーとして、各地を旅して情報を発信し、ヒジャーブ姿で旅する自分の写真をネットに公開し続けている。ジャカルタに暮らすプトリも、日本に住むアミラやブンガも、インスタグラムでお気に入りのムスリマをフォローし、その服装を参考に日々の自分の服装を決めている。SNS 上でフォローするのだから、日本にいるアミラが、ヨーロッパのムスリマの服装を参考にするのも容易なことである。また、現代の女性たちの間では、一般服のムスリム服としての着用も顕著である。ガミス（ムスリマ用のゆったりとしたワンピース）など、ムスリマ専用の服を身に着けるのではなく、多くの女性たちが、一般の服を組み合わせて、イスラームの教えに適

うコーディネートを作り出している。日本に暮らす女性たちは、ユニクロやH&M、Zaraなど、日本人の若い女性たちにも人気のショップで買い物を楽しみ、一般に売られているスカーフをヴェール代わりに身に着けることも多い。

日本に暮らすイスラーム教徒のヴェール着用について、先行研究では、外国人ムスリマと比較して、日本人ムスリマの困難さが強調されてきた。本稿の日本に暮らすインドネシア人女性たちに対するインタビューからは、イスラーム教徒を受け入れる日本社会の急激な変化を垣間見ることができる。1990年代半ば、高校生の交換留学生として来日したブンガは、町中で見ず知らずの人たちに、たびたび罵りとも取れる言葉を浴びせられている。2000年代半ばでも、都内私立大学に入学したアミラは、イスラームやヴェールについて誤解されたくない気持ちから日本人に近づくことができず、日本人の友人がほとんど作れなかった。しかしながら、このブンガもアミラも、現在では、日本社会のイスラームを見る目が、以前と比べ、大きく変化したことを感じている。1990年代半ばのオウム真理教の事件や、2001年の9・11アメリカ同時多発テロ事件を経て、日本人はイスラームや女性のヴェールに対し、拒絶する対応を取ってきた。一方、昨今では、ムスリム観光客や在日ムスリムが急増しており、イスラーム教徒やヴェールを着けた女性たちの姿は、日本においても急激に日常の光景になりつつある。本稿で話を聞いたブンガもサキナもアミラも、今では、日本での暮らしに困難を感じてはいない。

5　神との関係が規定する装い

衣服に関する既存の議論によれば、衣服とは、他者や社会が強く意識されるものであり、他者の視線や社会的な意識に応じて、個人の服装は規定される、とされてきた。本稿で話を聞いた女性たちにとっても、ヴェールやムスリム服はムスリマとしての自らのアイデンティティを示すものである。インドネシアに暮らすプトリも、日本に暮らすサキナもアミラも、ヴェールを身に着け、ムスリム服を着た時点で、他者から自動的にムスリマとして認識されてしまうことを自覚している。それゆえに、特に、日本で暮らすサキナやアミラは、非イスラーム教徒が大多数の日本社会にあって、自らがイスラーム教徒やムスリマの代表として、きちんとした行動をとらなければならない、という責任すら感じている。

しかし同時に、彼女たちの意識の中には、自分と周囲の人々以外に、常に神の存在がある。ヴェールやムスリム服も、他人に見られているのと同時に、神に見られ、神に試されているという認識があり、それゆえに、神の命令に適う服装をしなければならない、という自己規制が働いているのである。ブンガは、「神が喜んでくれることをしたい」という気持ちを持ち、どこに暮らしていても、「ジルバブの着用くらいはきちんとしよう」と考えている。

これまで衣服や衣装は、他者との差異化という機能を内包し、一方で、人の存在を社会的属性に埋め込む機能も持ちあわせるものと理解されてきた。こうした理解によれば、衣服とは、すなわち、自己と他者の関係性の中で作り上げられ、その社会的役割を担うもの

だった。常に変化していく自己と他者、あるいは社会との関係性の中で、人の身に着ける衣服も変化していくものだと考えられてきた。

しかしながら、イスラーム教徒の意識の中には、自己と他者の関係とは別の、いわば第3の極とも言える神の存在がある。そしてその神は、別の何かとの関係性で変化したり、揺らいだりは決してしない、永遠で絶対の存在である。その神に見られ、試されているという意識を持つからこそ、ムスリマたちは神に命じられたヴェールを身に着け、神の命令に適う服装を身に着けるのである。一方で、ヴェールや服装に関する神の命令は、概略的であり、仔細な事柄は人間の判断に委ねられていることは、本稿の1章2節で確認した通りである。本稿で論じた5人の女性たちも、神に命じられた最低限のルールを守った上で、自らの好みや、どこに暮して、誰と関わるか、などによって、自らの着用するヴェールと服装を決めている。これは、本特集「序」で示された中国モンの婚礼衣装に見られる規範性と審美性の作用という事例にも通じるものである。イスラーム教徒たちの装いは、このように、他者との関わりと同時に、神との関係性の中で、規定されているのである。

6　おわりに

本稿では、インドネシアと日本に暮らす20代から30代のインドネシア人女性に実施したインタビューに基づき、インドネシア人ムスリマのヴェールや服装に関する意識やその着用の意義を考察した。インタビューから明らかになったのは、インドネシア社会で益々増加し、また、日本社会でも頻繁に目にするようになったヴェール着用者の存在と、ファッション性を楽しみつつ、イスラームの教えに従おうとする一人一人のムスリマの姿である。彼女たちの装いは、他者との関係や、社会のトレンドに規定されるものだけでなく、同時に、神が命じる教えに従おうとする意識の中で規定されるものでもあった。

民主化と経済発展が進展するインドネシアであっても、一人一人のイスラーム教徒の意識の中には常に神の存在がある。また、インタビューで複数の女性に言及された通り、日本社会はその排他性から脱し、他者に対する門戸をようやく開き始めたように見える。経済的利益を追求するためだけの短絡的で表面的な理解を超えて、ともに未来を築いていくための理解が、私たち日本人には求められている。本稿が、現代を生きるイスラーム教徒たちに対するこうした日本人の理解の一助になればと願っている。

＜参照文献＞

大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編　2002 『岩波イスラーム辞典』岩波書店。

奥田敦　2011 「シャリーアの豊かさについて考える」奥田敦・中田考編『イスラームの豊かさを考える』丸善プラネット、pp. 214-233。

小村明子　2015 『日本とイスラームが出会うとき――その歴史と可能性』現代書館。

桜井啓子　2003 『日本のムスリム社会』筑摩書房。

佐藤郁哉　2015 『社会調査の考え方（下）』東京大学出版会。

佐藤兼永　2015 『日本の中でイスラム教を信じる』文藝春秋。
鈴木清史・山本誠編　1999 『装いの人類学』人文書院。
中田有紀　2005 「インドネシアにおけるイスラーム学習活動の活性化――大学生の関与とそのインパクト」『アジア経済』46(1): 35-52。
日本ムスリム協会　2002 『聖クルアーン――日亜対訳・注解』日本ムスリム協会。
野中葉　2015 『インドネシアのムスリムファッション――なぜイスラームの女性たちのヴェールはカラフルになったのか』福村出版。
――――　2010 「インドネシアの大学生によるタルビヤの展開――大学ダアワ運動の発展を支えた人々とイスラーム学習」『東南アジア研究』48(1): 25-45。
鷲田清一　2005 『ちぐはぐな身体』ちくま文庫。
――――　2012 『ひとはなぜ服を着るのか』ちくま文庫。

Damanik, Ali Said 2002 *Fenomena Partai Keadilan: Transformasi 20 Tahun Gerakan Tarbiyah di Indonesia*. Jakarta: Teraju..
Furkon, Aay Muhamad 2004 *Partai Keadilan Sejahtera: Ideologi dan Praksis Politik Kaum Muda Muslim Indonesia Kontemporer*. Jakarta: Teraju.

Faith and Dress : in the Case of Indonesian Muslim Females

Yo NONAKA

Keywords: Indonesia, Muslimah, veil, hijab, dress

This article clarifies the role of the veil and clothes for Muslim females, called Muslimahs, and to what extent faith affects how they dress based on interviews with Indonesian Muslimahs living in Indonesia and Japan. According to previous studies on fashion and the role of clothes, clothes have the function to differentiate a person from others, and at the same time, they also have the function to put him into a certain social group. However, it is clear that the Muslimahs are conscious of God when they dress. They believe that their clothes are not only seen by other people but also seen by God and that God tests their faith in him by seeing how they dress. This makes the Muslimahs dress and cover their heads in accordance with God's guidance. However, God reveals only general guidance about clothes, and detailed matters are left in the hands of human beings. The Muslimahs determine how to dress based on basic rules delivered by God in essence, and the further details

are determined by their own preferences, where they live, and who they interact with. Muslimah's clothes should be considered in a triangle framework; that is the interaction between oneself, others, and God.